

## 命のパンを食す・石井はるをのバプテスマ 1958

### はじめに

私の朝食の主食はパンです。8枚切りの食パン2枚では少し多すぎますし、6枚切り1枚ではちょっと物足りません。ということで今は5枚切りの食パンを買い求めています。5日間食べ続けるためできるだけ賞味期限の長いものを選んでしまいます。SDGs（エスディージーズ、持続可能な開発目標）の観点からは問題です。フードロスを少なくするために、賞味期限が短いものの方から消費すべきなのですが、いざとなると、どうしてもエゴが頭をもたげてしまいます。

食パンにも色々のメーカーの製品がありますが、先日スーパーで普段食べているより40円も安い5枚切りの食パンを見つけ購入しました。味わってみてがっかり、正に「安かろう悪かろう」の典型でした。とは言え、世界にはその日一日を生きるための食べ物もなく、飢えに苦しんでいる人々が大勢いる現実があります。何を基準に自分の普段の生活の満足度をはじき出せばいいのか、大いに考えさせられてしまいました。

### 1. 石井はるをのバプテスマ

歴史シリーズ16で書いた通り、1958年（昭和33）10月5日（日）に、吉岡伝道所の阿部利吉・花子夫妻がバプテスマを受けましたが、その日もう4名が受浸しました。その内の一人が石井はるをさんで、お手伝いとして宣教師館でグラント宣教師一家のために献身的に働いた女性です<sup>1</sup>。グラント宣教師はその著書の中で、スペースを割いて石井はるをさんについて紹介しています<sup>2</sup>。長くなりますがその部分を以下に引用します。

『ババちゃん』とは、キティ<sup>3</sup>が私たちのお手伝いさんの石井さんにつけた呼び名だった。

かつてこれほど献身的な乳母を持った子供は、王家でさえいなかっただろう。そして、これほど子煩悩な祖父母もかつていなかっただろう。さらに、これほど甘やかされた赤ちゃんもいなかった、と付け加えても良い。

石井さんは三年近く私たちのところで働いた後、キリストを受け入れた。その間、

私たちは毎日彼女のために祈り続け、可能なあらゆる方法で彼女に証しを続け、同時に彼女に決断をせまる圧力をかけないようにした。日本における雇用者と被雇用者の関係を考慮し、私たちは彼女が私たちが喜ばせるためだけに決断をするようなことを避けたかったのだ。

仙台における働きの中で最も嬉しかった体験の一つが、ある日曜日の朝、朝食後に『今日教会の皆様の前で信仰告白をいたします。他の者と共に、私にも洗礼を授けてください』と彼女に告げられたことだった。私たちは神が彼女を救われることを確信していたため、遅かれ早かれこのことが起きることを知っていた。私たちにとっては、子供たちの信仰について考えていたこと同様、確定事項だったのだ。しかし、それでもこのような状況でそれが起きるとは予想だにしていなかった。朝の礼拝後、彼女は真心から輝かしい証しを一切の原稿なしで行った。新しい信者は回心に至るあらゆる事項を述べようと必死で事前に原稿を書くのが普通である。石井さんの証しは、私がこれまで聞いた中では、完全にその場で語られた数少ない証しだった。

彼女の証しの中で、初めて聖書を手にしたのが、米軍の占領初期に仙台に駐屯していた GI からだったと語った。彼は彼女が初めて見た米軍兵士で、彼女は彼が予想していた野蛮人ではなかったことに驚いた。日本の当局は人々にあまりにおぞましい米軍兵士の姿を伝えていたため、皆実際に見ることになったものに対する準備ができていなかったのである。われわれの兵士がチョコレートとガム、こぼれ落ちるような笑みを携えて来た時、田舎に疎開していた若い女性が家に帰ることになった。われわれの兵士は少し前までは恨み連なる敵だった者に対し、略奪と強姦ではなく、援助を始めたのだ。石井さんはこの体験を忘れることができなかった。その後、彼女は何名かの宣教師の家族の元で働き、約四年後に経験を通して聖書が語る素晴らしい愛と許しとを見出したのだ。多くの日本人がするように、彼女も聖書にある教えを確認するため、クリスチャンを自認する人々の生き方を観察した。われわれも彼女の観察に気づいていた。そのため、私たちが彼女をがっかりさせたり、救いの扉の前にあるつまずきとなったりしないよう、さらに祈るようになった。

彼女の回心は、私たちの家では本当に祝福の時であった。娘たち、とくにキティーが来る前は彼女の『一番娘』だったデボラは、彼女の公の信仰告白の知らせを聞き、喜びの涙を流しながら彼女を抱擁し、キスをした。私たちはその後も優れた家

庭の手伝い手に恵まれたが、『ババちゃん』の穴を埋めることができる人は誰もいなかった。何故なら、彼女は単なる勤勉な働き手ではなく、私たちがより日本人を理解する上で優れた助言者であり、日本人とやりとりをする中で無作法を行う可能性から私たちが何度も救ってくれた。彼女はいろんな意味で、東洋と西洋との懸け橋であった」。

## 2. 同時代を生きる

北四番丁と上杉山通（かみすぎやまどおり）の角、ちょうど勝山公園の道路向かいに、美味しいパンで人気の石井屋があります。比較的広い駐車場はいつも満杯で、交通整理をする係も置いているほどです。昔の店は、現在の場所から少し離れた上杉山通小学校のすぐそばにありました。もともこの店は、戦前の 1928 年（昭和 3）、伊藤三蔵が屋号を「石井屋」として創業した和菓子店でした<sup>4</sup>。そして戦後少し経った 1954 年（昭和 29）に、二代目店主伊藤良三がパン作りを始めます<sup>5</sup>。まだ日本ではパン食が一般的にはなっていませんでしたので、色々ご苦労もあったことでしょう。しかし、日夜努力を重ねながら様々な困難を乗り越え、仙台でも評判のベーカリーへと成長しました。この石井屋と石井はるをさんとは繋がりががあります。初代店主伊藤三蔵はもともと石井家に生まれたのですが、養子となり伊藤家を相続します。はるをさんは三蔵の実の兄弟のもとに嫁ぎ石井姓となった方ですので、二代目店主良三から見れば「義理のおば」に当たるわけです<sup>6</sup>。

私たちの教会は、グラント宣教師により 1954 年（昭和 29）に幼稚園を開設し新会堂を建て、1955 年（昭和 30）3 月に教会組織を行い、日本バプテスト仙台基督教会として歩み出しました。つまり、1954 年からパン作りを始めた石井屋と仙台教会は、同時代を生きているのです。そして両者とも「パン」を大切にしています。石井屋は人々に愛される「美味しいパン」を作ることを大切に、仙台教会は「命のパン」（ヨハネ 6：48）であるお方をたゆまず宣べ伝えることを大切にしています。

どんなに美味しいパンを食しても、やがて空腹になります。またそのパンは魂の飢えを満たすことは出来ません。しかし、私たちの「パン」は違います。何故なら私たちが宣べ伝えている「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」（ヨハネ 6：51）からです。（文責：小林孝男）

<sup>1</sup>『主の息吹の中で』88頁に、「石井さんは三年近く私たちのところで働いた後、キリストを受け入れた」とある。石井が受浸したのは1958年10月5日、その後 Grant 宣教師一家が仙台を離れ次の任地に向かう翌年春まで、石井は Grant 家で働いていたと考えるのが自然だろう。と言うことは、石井はるをが宣教師館で働いた期間は、通算で三年半ほどであったのだろう。

<sup>2</sup> 同上 87~89 頁

<sup>3</sup> // 87 頁、1958年5月29日生まれ(京都バプテスト病院にて)

<sup>4</sup> <https://www.ishiiya.com/ishiiya/index.html> 三蔵は1896年(明治29)に石井儀三郎の三男として生誕。後に仙台藩士族、伊藤大助の養子となり、伊藤家の家督を相続する。屋号の由来は、創業者伊藤三蔵の兄弟が石井姓の為、あえて「石井屋」とする。三蔵はもともと松月堂で和菓子作りを修行し、大正の初めの頃は和菓子の卸業を営んでいた。

<sup>5</sup> <https://www.ishiiya.com/ishiiya/index.html>

<sup>6</sup> 石井はるをは何人かの宣教師のもとでお手伝いとして働いたとのことなので、パン作りのノウハウをその際に獲得した可能性もある。そして身に着けたパン作りの秘訣を甥にあたる伊藤良三に伝授し、それが「石井屋のパン」に繋がるなどというドラマがあれば嬉しいが、果たしてどうだったのであろう？



昔の石井屋(同店のホームページより)  
上杉山通と昔の石井屋、右下の三角部分は小学校校地の一部